

いのち—この神秘なるもの—

大型コンピュータの開発により、今、生命科学の研究が素晴らしい勢いで進んでいます。昨年は人間の全遺伝子情報である「ヒトゲノム」の解読が終了しました。

とうとう、人間は自分の「体の設計図」を解読する技術を手にしたのです。これによって、生命の謎が解けるのではないかと、大いに期待されたのですが、現実にはむしろその逆で、生命の不思議さは益々深まってきました。

ここで、ごく簡単に「ヒトゲノム」について説明しておきます。

人間の体はすべて細胞で出来ております。

成人で約六十兆個の細胞がありますが、その細胞の一個一個に、まったく同じ遺伝子が組み込まれています。

遺伝子はDNAと呼ばれる物質で出来ていますが、そこにわずか四つの化学文字（A、T、C、G）で表される情報が、約三十億書き込まれています。

この情報量を本にすると、千ページの本三千冊分に相当します。新聞ですと三十年分の情報量に匹敵します。まことに膨大な情報が遺伝子に書き込まれているのです。

この遺伝子の全情報（三十億の化学文字）を「ヒトゲノム」と言います。

さらに驚くべきことに、全生物が同じ遺伝子を持っているのです。

情報量は生物によって違いますが、わずか細胞一個で生きているカビや大腸菌も、植物も動物も人間も、すべて同じ遺伝子（A、T、C、G）を使って生きています。

これは、生物は間違いなく一つの細胞から始まったということを物語っています。

仏教では「いのちは、すべて平等であり、みんなつながっている」と説きますが、それを科学的に裏付けるものだと思います。

そこで、人間の生命の仕組みを見てみますと、元はといえば、たった一個の細胞（受精卵）が、遺伝子に書かれたプログラム通りに分裂を繰り返し、三十八週間で約三兆個の細胞からなる新生児として誕生します。

この間、母親の胎内では壮大な生命のドラマが繰り広げられます。

胎児は、地球上に生命が誕生した瞬間から今日の人類に至るまでの三十八億年の進化の過程を驚異的なスピードで再現していきます。

新生児はまさに地球生命。三十八億歳なのです。

また不思議なことに、同じ遺伝子を持った細胞でありながら、それが分裂をする時に、骨になる細胞、血管になる細胞、心臓になる細胞というように、それぞれの細胞が見事に役割分担をしているのです。

例えば、骨になる細胞は骨になる遺伝子だけ使い、それ以外の遺伝子は使わないようにしているのです。

この細胞の営みは、争いの絶えない人間社会に向かって、本来あるべき姿を語りかけているように思います。

こうした生命の不思議なはたらきを見ると、私たちは「子供を作る」と簡単に言いますが、それはまったく傲慢で不遜なことだということがよく分かります。

子供に関して私たちに出来る事と言えば、せいぜい生命が誕生するためのきっかけを与えることぐらいです。

それ以外に人間の力では、たとえ全世界の科学者が束になってかかっても、世界の国家予算をすべて使っても、米一粒、細胞一つをゼロから作り出すことは出来ないのです。

日本の遺伝子研究の第一人者である村上和雄先生（筑波大学名誉教授）は、

「ヒトの遺伝情報を読んでいて、不思議な気持ちにさせられることが少なくありません。これだけ精巧な生命の設計図を、一体誰がどのようにして書いたのか。もし、何の目的もなく、自然に出来上がったのだとしたら、これだけ意味のある情報にはなり得ない。

まさに奇跡というしかなく、人間業をはるかに超えている。そうになると、どうしても人間を超えた何か大きな存在というものを想定しないわけにはいかない。そういう存在を私は、『偉大なる何者か』という意味で、十数年前から『サムシンググレート』と呼んできました。それがどんな存在なのか具体的なことは分かりませんが、ただ、私たちの大もとには何か不思議な力がはたらいていて私たちは生かされている、という気持ちを忘れてはいけないと思います」

と語っています。

現代科学の最先端に位置する人の、この発言は、まことに注目すべきことです。

ここで言う「サムシンググレート」こそ、仏教で説く「仏さま」のことだと思えます。

詳しく言えば「法身仏」ということになります。

「仏」と名づけてはいますが、法身仏とは「私たちを生かしているはたらきそのもの」のことを言うのです。

仏教は何を説いているのかと言えば、「生きとし生けるものは、すべて法身仏によって生かされている」ということを説いているのです。

平たく言えば、「私たちは自分の力で生きているのではなく、生かされて生きている」ということです。

この法身仏を知ることが、仏教でもっとも大事なことなのです。
ところが、法身仏は、親鸞聖人もおっしゃるように「色も形もなく、言葉も心も及ばない」
ものです。まさしくサムシンググレートです。

これでは私たちにとって、全く雲をつかむような話になってしまいます。
そこで、法身仏が巧みな手立て（善巧方便）を講じて、姿かたちを持った仏さま（報身仏）
となって人間世界に現れ出でて下さったと仏教では説きます。
この仏さま（報身仏）が阿弥陀仏なのです。
阿弥陀さまのお掛け図の裏面には「方便法身尊形」と書かれていますが、このことを示して
いるのです。

そうしますと、阿弥陀さまは、形のない世界（法身仏）を私たちに知らせるメッセンジャー
だとも言えます。

私たちは、この阿弥陀さまを手がかりに法身仏の世界を知っていくのです。

阿弥陀さまのことを「いのちの親」とよく申しますが、村上和雄先生もサムシンググレート
を「生命の親」と表現しています。

仏教になじみのない方は、

「あるやらないやら分からんものを信じることは出来ん。もし仏さまが実際におるんなら、
見せてみー。そしたらわしも信じる」と、よく言います。

しかし私は科学がいくら進んでも、仏さまの存在を証明することはおそらく出来ないと考え
ています。

ただ、科学が進めば進むほど、人間は仏さまの存在を信じざるを得なくなる、ということだ
けは確信できます。

科学の世界の行きつくところは、間違いなく宗教（仏教）の世界だと思えます。

というより、仏教で説く世界（法身仏）に支えられて、私たち人間の世界の営みといったも
のがあると思うのです。

余りにも命を粗末にする事件が多発する日本の社会を思う時、私たちは、「人間を超えた大
いなるもの」に、もっともっと謙虚にならなければいけないと思うことであります。